
クロスロードプログラム

虚空俊哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロスロードプログラム

【Nコード】

N7617A

【作者名】

虚空俊哉

【あらすじ】

何処にでもいそうな高校生、伊角タクト。タクトが通う高校に不思議な女の子が現れた。そしてそこから全ての歯車が狂いだした。世界の破滅。人間ではない‘なにか’の出現。生き残りをかけた戦いが今始まる。

第一節

この世は、憎しみと悲しみに満ちている。

戦争、略奪、殺人、テロ。それでも人は、生きている。何かを望むように、何かにすがるように、毎日、神に神に祈りを捧げながら。。。

人はなんて醜いんだ。誰かに頼ることしか生きていけない。

そして、人は裏切るんだ。何かから逃げるように、何かから避けるように。

．．
そして世界は、歪んでいく。この世の破滅の旋律を奏でながら．．

第二節　始まり

俺が通う市立高校へと続く道は、とても細くなっている。生徒が道に二人並べるかどうかくらいだ。

だから、毎朝この道では、市立高校の連中の大行列が見られるのだ。まあ、珍しいとはいっても、さすがに入学してから三日もたつと、うんざりしてくる。

誰かこの道を広くしろよ。

という意見もここが山奥なのでそう簡単に工事車両も入って来れず、かれこれ創立から二十年ずっとこのままだ。

はあ、何でこんな学校なんぞ作ったのかねえ。しかもここら辺の地域にはこの高校一つしか無いってのは、どういういみだよ、

おれは、腹を立てながらもその、アリの行列のような軍列に溶け込むように入っていた。もう三度目だがなかなかねえ。

意外にしんどいんだぞ、これが。

春の温かい日差しを感じる間もなく、夏顔負けの暑さと戦いながら俺は鉛でもついたような足を学校へと運んでいた。

程なくして、俺はようやく目的地の学校につき、息をついた。

まだ慣れてない一年生はさすがにみんなきつそうだ。

汗がとめどなく流れる中、俺は教室の扉を開けた。

まあ普通なら『おはよう』の一言でも言って入るんだが、何せまだ入学したばかりだ。そのうえあまり人と話したくないこの俺が友達ができたと思うか？ いや、まあ一人、二人くらいはできたがな。

そついう訳で、俺は黙って教室への入口を跨いだ。俺の腰を休める場所は、窓際の後ろという、誰もが羨ましがるところなのだ。

今現在一番心地良い席に腰を下ろした。

ふと、窓の外を見てみる。校庭には、朝からやけに気合いが入っているラグビー部が大声をはっしながら走っていた。

いつもと変わらぬ朝。誰もがそう思い、そして疑わなかった。今後、世界が変わるような出来事が起こるうとは。

第二節ゝ始まりゝ（後書き）

まだまだ展開しませんね（笑）

第三節 〳日常〳（前書き）

まだまだ展開が…（笑）

第三節 日常

伊角タカトこと、俺は今気持ちの良い朝早くにかかわらず、机の上で熟睡していた。あゝ気持ちい。

しかし、不意に深く眠りに入っていた俺の脳みそが揺るいだ。

（な、なんだ??）

まだ、はつきりしない意識を覚醒させる。

「朝から熟睡かよっ？」

威勢のいい声が俺の頭に響く。ほんつとに、毎朝うるせーな。この声を聞けば考えなくても誰だかわかる。

八坂幸助。俺がこの学校で唯一の『親友』と、呼べる存在だ。

「うれせーよ。俺は眠いんだ。」

素っ気なく返事を返す俺。こんな態度もとれるのも親友と呼べる間柄だからだ。

「まったく、タカト!! お前は朝からよく眠れるなあ。夜ちゃんと寝てんのかよっ? それとも…」

そこまで言つと、幸助はニンマリ笑顔をよこしてきた。気味悪いよ、幸助。

「な、なんだよ?」

タカトが何を言いたいのか、わかっているのに問い返してしまう俺が憎い。

「何って、夜な夜なパソコンでエロ画ぞ、ウガッツ!？」

今何故会話が途切れたかと言うと、まあ言うまでもないんだが俺が
幸助を殴ったせいだ。とでもいっておこう。

「痛って〜！冗談だったのに〜！」

なら大声で叫ぶなっ！！

幸助が痛がっているうちに朝のホームルームのチャイムが鳴り響いた。

「くっそ〜。覚えてろよっ」

と愚痴をいいながら幸助は席に戻っていく。

まあいつものやり取りだ。

日課が終わりようやく静かになったところで担任の先生が入ってきた。それと同時にまた眠気が俺を襲ってくる。

俺は呆気なく白旗を振り眠気に身をまかせた。

「キンコーン…」

俺は学校の鐘の音で目が覚めた。うう〜ん、それにしてもよく寝た。今は、何時間目だろ？

ふと起き上がり、前の席の女の子に聞いてみる。

「神谷さん、今何時間目〜?」

寝起きなので少し鼻にかかった声になってしまふ。俺の席の前の女の子。神谷しおり。真面目で、成績優秀。ちよっときつめの性格が特徴の女の子だ。俺はあんまり得意なタイプじゃないんだけどなあ…。

その神谷さんが、上半身を反転させ俺の顔を見る。

「今は2時間目が終わったところよ。伊角君。あなた、寝過ぎ!」

きつい目をさらにきつくして睨んだあと、また前を向いた。次の授業の予習でも始めたのだろうか。一生懸命机に向かって何かを書いている。

俺はというと、きつく叱られて、気を落としていた。

俺って情けない…。

しかし眠いもんは眠いんだ!!という勝手なこじつけをして自分を慰めた。またまた、俺ってかっこわり…。

いつも以上に、暗い気持ちを引きずりながら、次の授業予定をみた。

3時間目 英語

英語かあ… 俺が1番苦手な教科じゃん!!次も、睡眠タイムかな。

こりないぜ、俺!!

しかし、その俺の睡眠タイムと予定していた時間が俺にとって、いや、人類にとって最悪のショータイムになるとは、この時俺は知る

よしもしなかったんだがな。

第三節 日常（後書き）

長らくお待たせしました。最近作者は受験勉強などで執筆が遅れてしまいました。すいませんm（――）m これからちよくちよく更新していくのでよろしくお願いします（・>|<・）

第四章ゝ悲鳴ゝ（前書き）

本当に申し訳ありません。作者は、受験の為続きを執筆できずにいました。言い訳っぽくなりますが、今後もう少し遅れるかもです…

そんな作者ですが、これからもよろしく願いますm（・）
m では本編をどうぞ

第四章　悲鳴

英語の授業を大半寝て過ごし、終了のチャイムがなるまで後10分という時だった。

『キイイッ！！ガタンッ！！』

金属と金属が擦れ合う音と共に教室の扉が勢いよく開いた。

俺はその物凄い音によって、混濁とした夢のなかから一気に現実へと引き戻された。

な、なんだってんだよ！！

寝起きで霞む視界を、なんとか正常にしようと擦ってみるが余計に視界が霞むだけだ。

その間に、教室の中はさつきとは違う音で満たされていた。

それは、生徒の甲高い悲鳴…絶叫…。。。

それは耳も覆いたくなる音だった。

俺はようやく回復した視力で真っ先に音のした方へと目をむけた。

……………え？

さすがに自分の目を疑った。

まだ夢の中なのか？　ベタだが自分の頬をつねる。…痛い、当たり前だ。

さすがにバカみたいな自分に嫌気がさす。

でもこの状況、夢だろう！！と思いたくなるのも無理はないと思う。

俺が向けた視線の先にはひん曲がった扉と、その下でうごめく奇妙な生き物だった。

足（？）は4本あり、その足で奇妙に体を支えている。

そして、前には頭が：　　そこまで見て俺は目を閉じてしまった。胸の奥から何か込み上げてくる。

『…っ！！ゲホッゴボッ』

俺はそのまま前のめりに倒れ、嘔吐してしまった。

俺がみたものは、有り得ない光景だった。

その化け物についていた頭は、どうみても人間だったのだ。しかし、普通のそれとは全然違う。

髪の毛は数本しか生えておらず、目は血走り白目をむき、口には『歯』ではなく、より鋭利になった『刃』がついていた。

なんなんだよっ！！これは！！

俺は既に混乱していた。本能であの化け物は危険だ、とわかっているのに体は動かない。

俺以外のみんなも同じようだった。

逃げたくても逃げられない。教室には悲鳴と助けを呼ぶ声で浚にうるさくなっていた。

その時だった。今まで動かなかった化け物が、元は人間だったであろう目をグリグリ動かした。

そして、あるうことが、こっちに顔を向けて動き出したのである。他の生徒には見向きもくれず、“そいつ”は向かってきた。

な、なんで俺なんだっ！？

叫びたくとも、恐怖で声がでない。

せめて目をつぶろうと瞼を動かそうとも、全身が恐怖で金縛りにあい、動かすことができない。化け物はもう目の前まできていた。

「き、ギギグア」

鋭い刃が並ぶ口から、奇声とも呼べぬ、音が漏れた。
よだれでべとべとになった口を浚に大きくあけ、俺を押し倒す。

ああ、俺喰われるんだな、

何故かすごく冷静になる自分に驚きつつ、段々せまってくる化け物の顔を眺めていた。
すべてがスローに見える。回りの悲鳴などは聞こえない。ただ残るのは静寂のみ…

…あれ？それにしてもスローすぎやしないか？まるで止まっているみたい…

しかし、次の瞬間止まっていた風景が再び動き出した。

化け物が突然俺の視界から消えたのだ。

！？

いや、正確には俺に覆いかぶさっていた状態の化け物が、真横に吹っ飛んだのだ。

えっ…えっ？

今一状況を把握してない俺。誰が化け物を？

その答えはすぐにわかった。俺は、化け物が吹っ飛んだ方向とは逆の向きに、首をまわした。

そして、徐々に床にあった視線をあげてゆく。

そこには、、一人の少女が立っていた。

第四章ゝ悲鳴ゝ（後書き）

次の回で正体がわかります。展開遅くて申し訳ないです（^-^）；

第五節ゝ厄日ゝ（前書き）

ようやく更新しましたm（・・）m

第五節　厄日

それは、鮮烈だった。

化け物の悲鳴。

女の恍惚の表情。

その様子を、俺は呆然と見ていた。

「君が伊角クン？はっは。意外と弱そっ」

返り血を全身に浴びているのに女は表情一つ変えず、笑っていた。

『グ、ガガ？』

突如聞こえたうめき声に、タカトは振り返った。

「え、あ、まだ…生き、て、」

タカトは、恐怖のあまり、舌が回らない。

「あれ…？まだ生きてたんだあ。」

女は大して驚きもせず、長い髪をかきあげながら笑った。

「でも、もう…死んじゃっていいよ」

クスクスと笑いながら、腕を地面と水平にゆっくりとあげる。さっきは動揺して気づかなかったけど、その手には巨大な弓が握られていた。

女は弓道の射法をまったく無視して、いきなり『会』の状態へと持っていく。大きく引き絞られた弦がキシキシと音を立てながらさらに引かれていく。

しかし、タカトはあることに気づいた。

「あの、矢は…」

そう、女は弓だけを持って構えている。

「ん？そんなものはいらないよん」

タカトが、理解できないという顔を見て、にやけながら言った。

「さて、と、そろそろ片付けますか。」

一つ息をはき、限界まで引き絞られた弦を、思いっきり解き放った。その瞬間、ものすごい轟音と共に、殴りつけるような風圧がタカト達を襲った。

とても、目を開けていけないほど、凄まじい風はほんの一瞬で通り過ぎた。

「はいっ、掃除完了！！さあて、と。」

女の声が聞こえ、タカトはゆっくりと目をあけた。そして、無残にもぐちゃぐちゃになった化け物の残骸が転がっているのに気づいた。

「うつ……。」

さすがに気分が悪い。なんせ、外見は人に少し似ていたのだ。それがこんな姿になっているのをみたら、誰でもこうなるだろう。

しかし、女は平気な顔をして、何事もなかったかの様にクラスのみんなに聞こえるような声で言った。

「あゝ、と、えゝ、みんなは今から病院に行つてねゝ。外に車、待機させてあるからさつ。」

全然筋の通つた説明のしてない女にたいして、みんなはただ呆然としていた。

それに見かねた女が、明らかに不満そうな表情を浮かべ、携帯をとりだした。

「……ん、もしもゝし。あゝうん、今終わったよん。それでさ、…うん、あの、後片付け、よろしくね？て、ことではいばゝい。」

と、言うと、一方的に切つてしまった。

「これでよしつ、と。」

それからしばらくして、教室の扉が音を立てて開いた。

生徒達は、一斉に教室の扉に注目する。小さく悲鳴を上げる人もいた。

それもそのはずだ。先ほど、その扉から化け物が入ってきたばかりなのだ。一生のトラウマになつてもおかしくはない。

みんなの視線の先には、化け物ではなく、よくホラー物の映画で出てくる、白い防護服みたいなものを着た集団が現れた。

頭まで白いヘルメットみたいなのを被っており、顔は見えない。

それは正常な人が見れば、異様な光景だった。しかし、僕達は、今は何も感じる事ができなかった。ただただ、呆然とその謎の集団だ教室に入ってくる光景を眺めていた。

しかし、タカトはあることに気付いた。

その集団の中に白い防護服を着てない人がいたのだ。よく見てみるとそれは、この学校の校長だった。校長は顔を本当に真っ青にして、そこに立っていた。何人かの生徒は気付いたようだ。

校長は、顔が悪いまま、今にも倒れるんじゃないか、と思うほどだった。白い集団が完全に教室に入った所で校長は、言葉を一つ一つ、吐き出す様に言った。

「…今すぐ、この、教室から、出てください…。そして、この方達と病院に行きなさい。詳しくは、そこで、説明…しますのです。」

喋り終わりと同時に、逃げるように教室から出て行った。

それが合図のように、白い集団は生徒達を教室から出るよう誘導し始めた。最初は動かなかった生徒達も後から来た先生達に誘導され、教室を出て行った。

タカトも、最初は動かなかったが教室に残った生徒達が少なくなってきたので、なぜか焦りを感じ、自分も出ようと腰をゆっくり上げた。

しかし、今まで黙って立っていたあの女が何か思いついたような表情を浮かべ、こちらに近づいてきた。

俺はなるべく早く教室から出ようと、足を速める。

しかし、気付くと女はタカトが出ようとしていた扉の前に立っていた。

（…え？俺より後ろにいたのに…何で扉の前に？）

一瞬、寒気を感じた。リアルに背中冷や汗をかく。

女は先ほど見せた変な表情を顔に貼り付けたままタカトに歩み寄ってきた。

目の前まできて、いかにもニヤリという擬音語がしそうな笑顔で口

を開いた。

「あれ？伊角君、どこ行くのかな？君は僕と一緒に来るんだよ？」

今日は、人生最大の厄日だな…。

第五節ゝ厄日ゝ（後書き）

何かと更新遅れて、本当に申し訳ないです。まあ、このような駄作を読んでくれている人はそういないと思いますが…（笑）
やっと自分専用のパソコンを買ったのでこれからは定期的に更新できると思います。これからもよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7617a/>

クロスロードプログラム

2010年10月14日16時24分発行